

軍艦音羽製造一件

三

0006

調年申 國 珍 同 社 一 取 立 八 江 号
丁 新 道 三 十 同 地 三 十 同 地 珍 同 社 二
有 其 他 八 十 個 社 一 道 取 立 一 年 一
号 又 右 外 三 左 三 新 同 社 取 立 一 同
是 七 毛 同 社 一 取 立 一 年 一 同 社 一 同

五 十 五 同 社 一 取 立 一 年 一 同

五 十 五 同 社 一 取 立 一 年 一 同

社 号 村 長 鏡 右 郎

口 五 十 五 同 社 一 取 立 一 年 一 同

五 十 五 同 社 一 取 立 一 年 一 同

社 号 福 井 孝 治

五 十 五 同 社 一 取 立 一 年 一 同

0008

國書刊行社

社告 柳澤高之助

友人の回書

三年十一月

柳澤高之助

長年格闘の先内外者同社長
七武場ノ御念書ノ御筆也
此書乃我ノ友ノ書也

海軍

0009

東京の名新字社

所在地	社名	社長名
東京都尾花町一丁目一番地日報社	東京日新新聞社	専務 越山太力三郎
〇 銀座町一丁目一番地日新社	読売新聞社	社長 本邸盛亨
〇 南船町二丁目一番地	時事新報社	主任 光吉荒次郎
〇 尾花町新地七番地	毎日新聞社	社長 鳩田三郎
〇 神田区河三丁目二番地	日本新報社	社長 陸 実
〇 幸橋区銀座四丁目九番地	中央新報社	社長 大岡 育造
〇 〇 高平一丁目	秀英新報社	社長 山田 友吉
〇 〇 幸橋区三丁目十番地	報知新報社	社長 箕浦 勝人
〇 〇 山手町十八番地	人民新報社	社長 菅原 傳
〇 〇 麹町区内幸町一丁目五番地	都新報社	社長 廣 亨郎
〇 〇 京橋区三丁目一丁目一番地	日出新聞社	社長 松下 軍次

東京三浦船

東京三浦道

左 米女町十五

東京通信社

左

五十嵐光彰

左 本根町五丁目十五

以在通信社

左

川田力夫

左 西紺屋町十一

中外通信社

左

倉長忠

左 横山所、安

自由通信社

左

高田基十郎

左 三軒宮、安

自由通信社

左

高田基十郎

権右左衛門 権右左衛門

東京通信社

東京通信社

社長 村居鉄次郎

0014

日本橋区上植町廿五番

東都日報社

社長 福井孝治

日本橋区牛川町十九番

海軍

0013

東京通信社
社長 宮下十右衛門

東京電報社

社長 村松鉄次郎

日本橋区上槇町十七番地

東都日報社

社長 福井孝治

日本橋区牛川町十九番地

国益社

社長 柳沢高之助

0014

Handwritten text on the right margin, likely a date or reference number.

副官



参事官

發行
十月廿日

年月 日起案

大臣

總務長官



Vertical handwritten text on the left side of the document, possibly a signature or official note.

0015

本館蔵書目録見分同書了案右ハ
裁、標準中

旭東院、部

漢書秘本

古本、部

三才、部

三才、部

三才、部

三才、部

次長

一般、部

本館蔵書目録見分同書了案

可加ハシ方、可然、外、其、地、二、書、見

0016

職名

内閣

総理大臣 書記官長 秘書官長

参事官長 法制局長官

大臣待遇者

枢密院

院長 副院長 各顧問官

書記官長 議長 秘書官

官房

大臣 内閣 各局長官

秘書官長 各局長官 各課長官

各課長官

内閣府 職名

0019

菅

菅原長春

菅原長春

大長春

大長

菅原長春

右長春

菅原長春

菅原長春

主計長
主税長
地頭長

元帥府

元帥府

陸軍省

大長

菅原長春

菅原長春

先任長

菅原長春

菅原長春

菅原長春

菅原長春

部下長

菅原長春

菅原長春

菅原長春

宮内省
左大臣
右大臣
中納言

兵部省

兵部卿
兵部少輔
兵部中納言
兵部少納言

兵部中納言
兵部少納言

刑部省

刑部卿
刑部少輔
刑部中納言
刑部少納言

刑部中納言
刑部少納言

大納言

大納言
大納言

大納言
大納言

大納言
大納言
大納言

0022

香齋園書

司法書

古居

陸防書

秘書及

古居

日檢書

文部書

古居

陸防書

秘書及

古居

古居書

古居書

古居書

古居書

古居書

古居

陸防書

秘書及

古居書

菅

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

菅原長

高島武志

○宮廷録事

明治三十三年十一月三日

○行幸仰出 天皇陛下ハ來ル十一月二日横須賀軍港ニ於テ軍艦進水式舉行ニ付キ同日午前九時三十分御出門同港ヘ 行幸アラセラルヘキ旨今三十一日仰出サレタリ市内及横須賀御道筋並ニ御發著割左ノ如シ

市内御道筋

正門ヨリ櫻田門ヲ出テ外務省前通左ヘ内幸町幸橋ヲ出テ左ヘ二葉町通新橋停車場

横須賀御道筋

停車場ヨリ左ヘ横須賀町通ヲ右ヘ港町ヲ過キ左ヘ右ヘ左ヘ幸橋ヲ渡リ汐入町汐留町元町ヲ過キ左ヘ鎮守府ヘ

御發著割

十一月二日

午前九時三十分

御出門

同 十時

新橋御發車

同 十一時三十七分

横須賀御著車

横須賀停車場ヨリ直ニ御馬車乗御鎮守府御著御晝餐

午後二時

進水式場ヘ臨御

同 三時十五分

鎮守府御發車

同 三時三十分

横須賀御發車

同 五時七分

新橋御著車

還幸

○宮廷録事

明治三十三年十一月四日

○行幸 天皇陛下ハ御豫定ノ如ク一昨二日午前九時三十分御出門十時新橋停車場御發車横須賀軍港ヘ行幸三等巡洋艦管羽進水式場ヘ臨御午後三時十五分鎮守府御發車同三十分横須賀停車場御發車同五時三十分還幸アラセラル

軍

Handwritten notes on the right margin, including the characters "海軍" (Navy) written vertically.

副官



参事官

月 月 日 起 案

十廿日

大正

Vertical handwritten text, possibly a signature or official name.

Main vertical handwritten text, likely the body of the document or a report.

海軍 (Navy)

0028

ゆのきん見

むら 報名

陸軍省の
[redacted] 車も
[redacted]

部内
[redacted] 口
[redacted]

部内
[redacted] 口
[redacted]

むら 報名

むら 報名

むら 報名

むら 報名

むら 報名

0030

午後	午後
七時	七時
四五分	四五分
午後	午後
五時	五時
十分	十分
午後	午後
七時	七時
四十分	四十分
午後	午後
七時	七時
四十分	四十分

天

海軍省
海軍部

鐵道部第三三九七

來此十一月之橫須賀軍港に在り三
等船洋一船は水式並行ふと書白横
須賀艦守府司令官官邸に依り東京
と柔向の海軍將校その他各者高
等官多敷來車自當り午七時四十分
分新橋發見九時十分横須賀着及午
後五時十分横須賀發見七時十分新橋
着列車一、一等車増車一、新橋横須
賀間往來乗車券發賣方之圖シ車
此段乃古四三三三

鐵道部

0032

鐵信館業局

鐵信館業局

廿一年
十月二十日

澤野部長平井啓二



野間口海軍大臣秘書長殿

(通印用)

0033

山本海軍大佐

○ 軍東大將

○ 実者 軍遠細長

~~有馬中將~~

○ 有馬中將

○ 伊集院中將

○ 石黒海軍技師

~~有馬中將~~

○ 肝付大將 伏双造 江田中將

○ 宮原 橋本 高島

○ 阪本 大將

海

軍

(坂根製)

0040

又 高者 水交支社の子 畫年者

口伝教イタシ友人卷

有馬中尉

佐江煙名

宮原煙名

佐波持所

室善煙名

肝身名

ノ六人テスガ試ノ外ニ少シ、フエニヤモ知レズ
フエタナラバ ~~ナ~~ 今日後所ニケテ
可急也シ 肝身名

(坂根親)

0041

横断扇友

海子者多見

一愛雅

百華下見分トシテ

時申建に置て先通本口

吉田定由年記見日記西終地也

貴子前、
系之付 且年者白ハ昨年の

振念ニヨリ 貴子前ニテ

0042

ト田中

海軍省より送りせん
下サレタシ
其
其
其

十六
其
其
其

0043

一部の別及至他事項より諸君コレニ
諸事と云ふ年々時年々格の格を成る
車ニ云云云云云云云云云云云云云云

方体、設備、昭示、昭示、昭示、昭示
水武、昭示、昭示、昭示、昭示、昭示

今度、昭示、昭示、昭示、昭示、昭示、昭示
昭示、昭示、昭示、昭示、昭示、昭示
昭示、昭示、昭示、昭示、昭示、昭示

其他、昭示、昭示、昭示、昭示、昭示、昭示
昭示、昭示、昭示、昭示、昭示、昭示

海軍

0046

海軍

東京三浦

酒肴料下賜可相成人負

親任官 兩任官 審任官 判任官 卒 府負 職 庸人

司右長官 一 一 四五 八 一四 二四

艦政部 一 二 三 一 一

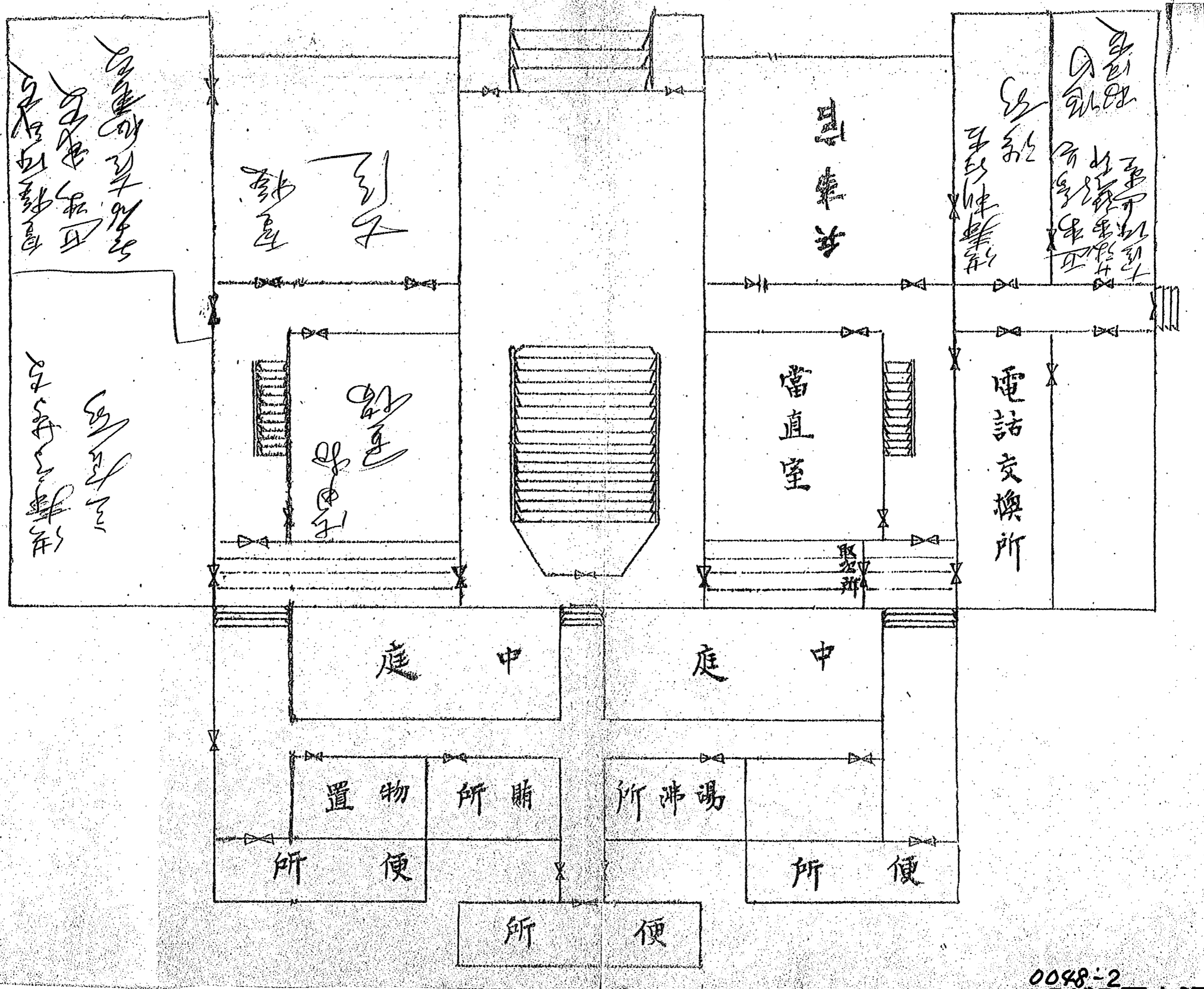
造船廠 二五 六三 五五 五九〇〇

港務部 一 一〇 一七 七六 一七六

計 一 三 四 九 一四六 六〇七三

外、海軍部、海軍省

費一



齋

齋藤海軍省副官殿

去月二日軍艦青羽進水式御執行。行幸之際左記ノ通函者料下賜相成候。寄替看。以。御進金候條各片入。度方可然。御取計相成度此段及御依頼候也。

明治三十年十一月五日

神原横頭督領守府副官



0049

九記

一金七十五錢

海軍中將曾壽山本推儀

一金七十五錢

海軍中將有馬新一

一金七十五錢

海軍造部佐佐木大輔

一金七十五錢

海軍少佐尾花正三郎

一金五十錢

海軍大佐齋藤孝三

計金叁円五拾錢

0050

坂常

部員大木

日起案

發
十月
日

和洋

和洋

第二課長

第一課長

課員

和洋

年
航
音
羽
制
衣
送

0051

本件
モ
亦
新高
符
箋
令
し

經理局

和洋

0052

無政本部長

第三部長

第四部長

總理局長

第一課長

横領部 八〇四號

經理局

東京三浦法

軍艦音羽製造費豫算生産増額

儀上申

全指之萬五千九指七圓七角七釐

右軍艦音羽船体部及機関部製造費

豫算之明後三年五年四月全指百參指

萬九千貳百四指貳圓四角五分接之再奉同豫

算額以範圍内之於製造完成方針

立之進行セ之居テ處別紙明細書通

リ實際ニ於テ前記ノ全額増額ハ所カシ

製造費豫算之不足ヲ告テ到底完成見

難相立テ条増額相成度別紙明細書

海總第三〇九七號

相承、此般及上申、秀也

明治三十年九月九日

横濱、此書封、夏老、男、壽、井、之、良、壽

海軍大臣男壽山奉權名衛殿



0055

軍艦音羽製造費豫算明細書

豫算令達ノ際算定セシ内譯

一金五拾七萬八千五百五拾圓

船体部

内

金貳拾參萬七千八百六拾四圓

職工費

但船体部重量千八百貳噸ニ對シ老噸ニ付工數貳百四拾人ヲ要スルモノト豫定シ其平均日給金五拾五錢トシテ算當セリ

金參拾四萬六千八百八拾圓

材料費

但後來ノ統計及市價ノ斟酌シ老噸ノ價格金百八拾九圓六錢弱トシテ算當セリ

製造費實際所要額明細書

一金六拾四萬參千六百四拾七圓參拾七錢

船体部

内

金貳拾六萬九千五百七拾九圓貳拾錢

職工費

但志噸ニ對スル工數及其平均日給當初前段ノ如ク算當セ

シモ實際工數約貳百七拾貳人ヲ要スル見込ナルニ因ル

金參拾七萬四千六拾八圓拾七錢

材料費

但志噸ニ付當初材料代價金百八拾九圓六錢弱ニテ算當セ

ニ市價次第ニ騰貴シ金貳百七圓五拾八錢五厘ヲ要スル

見込ナルニ因ル

差引 不足金六萬九千九拾七圓參拾七錢

豫算令達ノ際算定セシ内譯

一金七拾九萬六千九拾貳圓

機關部

内

金貳拾四萬四千貳拾四圓貳拾錢

職工費

0057

但機関部重量七百六拾五噸ニ對シテ噸ニ付工數五百八拾貳
人ヲ要スルモト豫定シ其平均日給金五拾四錢トシテ算當
セリ而シテ軍艦新高比シ工數ノ多額ナルハ新高ニ於テハ
「ニコロース」式汽罐ヲ購買据付シモ本艦ニ在リテハ汽
罐製造ノ上据付ヲ為スニ因ル

金五拾壹萬貳百六拾七圓八拾錢

材料費

但従来ノ統計及市價ヲ斟酌シテ噸ニ付金六百六拾七圓
七錢七厘弱トシテ算當セリ軍艦新高比シテ噸ニ對ス
ル費額ノ廉價ナルハ職工費ニ於テ汽罐製造ノ為メ増
加セシ金額ハ本費ニ於テ減少シタルニ因ル

製造費實際所要明細書

一金八拾五萬六百九拾貳圓

機関部

内

金貳拾八萬九千百七拾圓

職工費

但志噸ニ對スル工數及其平均日給金當初前段ノ如ク
算當セシモ實際工數約七百人ヲ要スル見込ナルニ
因ル

金五拾六萬千五百貳拾貳圓

材料費

但志噸、付當初材料代價金六百六拾七圓壹錢七厘弱
ニ算當セシモ市價次第ニ騰貴シ金七百參拾四圓壹
錢六厘弱ヲ要スル見込ナルニ因ル

差引不足金拾萬圓也

不足通計金拾六萬五千九拾七圓參拾七錢

横造之目録七三跡

新了ははにをね七字のりし餘用少類
 二方し然を對するに於ていふるを
 ね七字のりし餘用少類
 白の世無し今第一付方物一公の御
 其の文十の字印のりかつんを枕矣是道
 船師部を定むるに五の用機圖部を定むる
 同計を定むるに五の用機圖部を定むる
 七サレハ之成るは此の也と有し

横造之目録七三跡

毎頁

0060


大田洋次郎

電話

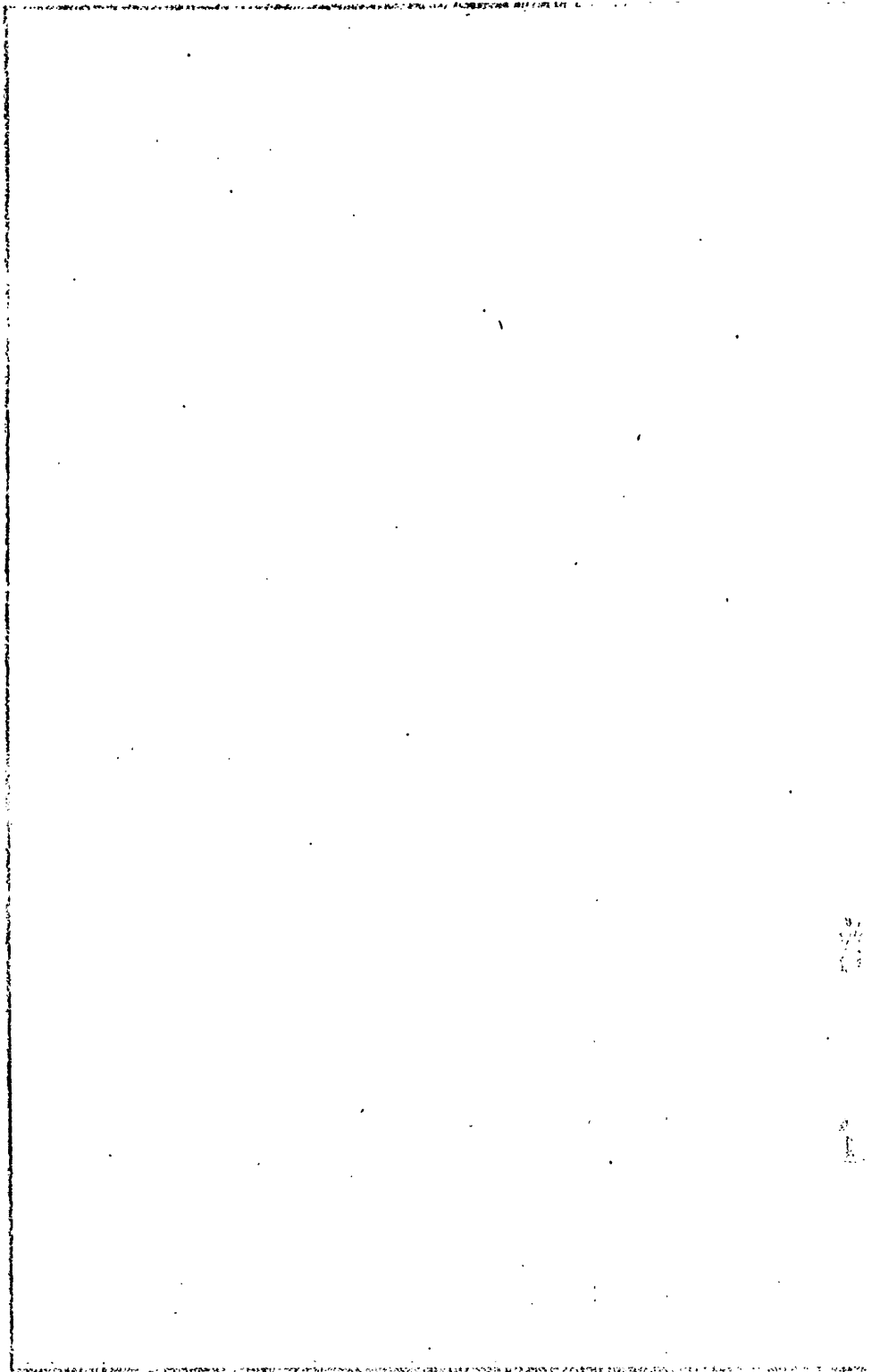
軍務局

植田恒雄身府副官

宛

来々月々音羽、進水式ニ参り
次常吉、東ノ地り、赤尾、公、お年、
をモ、西條、ハ、内、水、臨、幸、り、作、り
コト、
大、臣、ヨ、リ、テ、知、ル、言、上、申、付、
其、積、リ、ミ、テ、亦、地、り、お、年、
三、十、六、年、十、月、十、二、日、
新、島、村、本、


0062



0063

供

軍務局

第...番

鐵道作業局 第六三七號

來ル十一月二日横須賀ニ於テ三等車洋
 艦進水式舉行ニ付キ
 天皇陛下下行幸被為在候趣ヲ以テ御
 召列車運轉時刻御打合せ、趣了
 兼御申越、時刻ニ差支無之候
 此段及御回答候也

明治三十六年十月十九日

鐵道作業局長官古市公威

海軍省副官來川藤孝至殿



鐵道作業局

十月九日



0064

海軍省副官



發付濟

軍務局第一課長



課員

第二課長

案



来月十月十日、持て候に、三奉、此等記、復、此、
或、為、此、の、台、天、皇、
行、幸、り、仰、札、夜、行、儀、の、
件、一、通、告、奉、上、の、判、者、大、玉、皇、り、具、奉、可、相、成、
件、中、法、軍、軍、轉、上、直、向、向、部、合、の、如、所、可、有、
之、以、何、の、係、係、急、急、所、同、名、お、候、以、此、の、所、
候、也、

三十五年十月十日

海軍省副官
海軍省副官

0065

大正十四年十月十日
海軍省副官

供覽

丙第四七八

近日横須賀軍港、行幸、御内意被為在御前
下見台より来る、三十日午前九時三十分新橋農
海軍三少官系日野西侍後等日港へ出張致候
間御有り、七時名出向、東山、秋波申進候
也

明治三十五年十月十八日

宮内書記官吉田醇一

海軍省副官

中

右田中代、海井隆生等

右志内菊卜、松島長一、田中、内省

明治三十五年十月十八日

0066

あ
武高より四角以余ふ能くは
あゆむ物なきはたふ余も生かすは
たふ余も生かすは

さうさうしりあ

あさあさあ

丹羽宗元おはる

0068